

## 「雪と氷のワークショップ in 高知」 報告

宮 英司

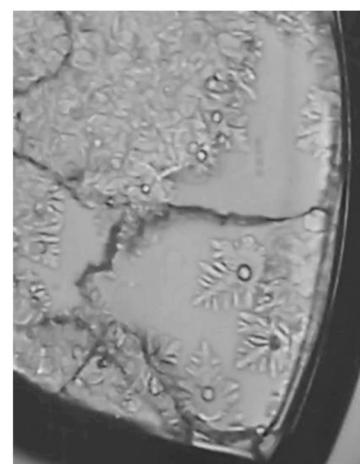
夏休み直前の 2022 年 7 月 18 日の海の日に、小学生向けの講座「雪と氷のワークショップ in 高知」が、高知市の高知みらい科学館で開催された。主催は「中谷宇吉郎雪の科学館友の会」（石川県）。後援が「高知みらい科学館」である。

中谷宇吉郎氏は石川県加賀市出身であり、世界初の人工雪の製作に成功した偉大な科学者である。高知出身の寺田寅彦の一番弟子としても知られる。今回は、独立行政法人国立青少年教育振興機構の「子どもゆめ基金」の支援を受けて、「体験の風をおこそう！」というサブテーマのもと、午前・午後 2 回の実施を計画して、6 月 25 日から募集を始めた。各回 20 名の募集はわずか 5 日間で定員オーバーとなり、キャンセル待ちへも申し込みが来るほどの盛況ぶりであった。暑さの厳しい真夏の高知と「雪と氷」の意外な取り合わせが受けたのだろうか。

当日は、オーテピア図書館 5 階の高知みらい科学館の実験室に親子が参集し、北海道で採集された雪の結晶のレプリカをスマホで撮り、氷に光を当ててできる雪の結晶に似たチンダル像を観察するなど、目的に向かって、親子が協力して立ち向かうエネルギーが充満するのを感じるほどであった。

最後は「中谷宇吉郎雪の科学館友の会」の神田健三顧問らによるオリジナル教具を活用した、「氷のペンダント」作りであった。どのテーブルでも指導者の先生と保護者の熱心な支援のもと、納得の結果へとゴールしていき、満面の笑みを浮かべた子どもたちの表情からも大成功と言える結果となった。子どもたちの感想を拾ってみた。

- ・氷を偏光板ではさんで光を当てると、氷にいろいろな色が見えました。
- ・とてもきれいでした。氷がいくつかの結晶でできているということが分かりました。
- ・氷に強い光を当てると氷の内部が



チンダル像



氷のペンダントを完成させた参加者  
(撮影 若林章)

解けてチンダル像が見えました。チンダル像は花びらのように変化していくのが分かりました。とても不思議でした。

・氷に糸を垂らして、塩をかけることで氷釣りができました。とてもおもしろかったので、家でもやってみようと思います。

・アルミニウムを使って氷のペンダントを作りました。アルミの型に氷をいれ、アルミの蓋をするだけで簡単にできました。

・星型の氷のペンダントを作りました。そのあとみんなで記念写真を撮りました。とても楽しかったです。

・小学3年生の女の子は「氷のペンダントをアイスボックスに入れて持って帰ります」とご満悦だった。

神田氏は「南国でも楽しめる、氷のチンダル像の美しさを知って欲しい」と語り、今後についても「高知は中谷宇吉郎と寺田寅彦のご縁もあるので何度でも足を運びたい」と意欲的に語ってくださった。講座の終了後には、近くの喫茶店で中谷宇吉郎雪の科学館友の会と寺田寅彦記念館友の会のメンバーによる交流会も開かれ、今後ますますの交流を誓い合って散会した。

(日本教育新聞 四国版 より転載)

## 寅彦の情報あれこれ

### 【書籍紹介】

☆『科学と詩の架橋』(大嶋仁、2022年8月31日、石風社)

シモーヌ・ヴェイユ、レヴィ=ストロース、寺田寅彦、岡潔、宮沢賢治が取り上げられている。あとがきによれば「科学と詩」をテーマとし「数量化できないものを数量化しようとする実証科学の傾向に対しての警告であり、なかでも「時間」という人間の本質を数量化しようとする試みに対しての、強い反意の表明」とのことである。

第三章が「寺田寅彦における俳諧と物理学」となっている。

「春六題」から「生命の物質的説明という事からほんとうの宗教もほんとうの芸術も生まれて来なければならない」を引用し、

科学的な見方とそうでない見方がどこかで和解する時が来て、物理学と俳諧詩がひとつになる、としている。

寅彦が松根東洋城と実作した連句について、ゲームに参加して次から次への

句をつないでいくことを楽しむのが主であって、全体としての結果はさほど重要ではない、寺田は俳諧を科学に匹敵するものと考えていた、とある。

寺田の結晶によるX線回折の研究がブラッグの数式化に対して、結晶構造の幾何学



『科学と詩の架橋』表紙